

米国ニューヨーク補習授業校幼児部における 日本語・日本文化教育の現状と課題（Ⅲ）

ブラック妹尾祐美子（ニューヨーク補習授業校ロングアイランド校）・
北川歳昭（教育心理学科）

A report about Japanese teaching method for language and culture
in early childhood education at Japanese Weekend School in New York (Ⅲ)

Yumiko SENOO BLACK (Japanese Weekend School in New York)
Toshiaki KITAGAWA (Department of Educational Psychology)

抄 録

多民族、多文化国家であるアメリカの大都市ニューヨークに設置されている日本語補習授業校幼児部（幼稚部）担任の立場から、第二言語としての日本語学習、地域特性や環境特性による日本文化の浸透の難しさなど、異文化の中での日本の幼児教育の現状と課題について事例を含めて紹介する。著者らは、すでにニューヨーク補習授業校の概要と特色を紹介し、子ども達の発見やクラス内の子ども達の実際の事例を元に、日本語を第二言語、日本文化を異文化として育つ日系幼児の実態と現状を報告してきた^{1) 2)}。本稿では異文化の中で日本語幼児教育を実践するために、担任が配慮すべき事柄、言語習得の際の環境整備の大切さや、文化を含めて言語を学習することの大切さについて論及する。

キーワード：異文化間日本語幼児教育、第二言語、バイリンガル、バイカルチャー、
日本語補習授業校、地域特性、日本文化

I はじめに

本稿は、幼児の第二言語習得の際に環境や文化が重要な役割を果たすことに言及する。

近年、日本でも、バイリンガル教育として早期英語教育に取り組む幼稚園や小学校が増加しているが、本稿では、米国ニューヨーク市にある日本語補習授業校（以後、補習校）の幼児部、年中クラスでの実際の現状と課題を事例とともに提示し、生まれながらにして多言語・多文化の環境の中に身を置く日系幼児に対して日本語幼児教育を行う際の、担任がすべき配慮や異文化間日本語幼児教育のあり方について模索するものである。

なお、前稿^{1) 2)}で報告したように、ニューヨーク補習校幼児部は、年中2クラス、年長2クラスの全4クラスで編成されている。児童の保護者のうち約90%が国際結婚をしており、その家庭の児童は21歳までは日本国籍とアメリカ国籍の両方、又は3カ国の国籍を持つ多